

心を育てる道がほしい

機関紙「才能教育」第8号（一九四九年）より

鈴木鎮一

人の心も、才能として育ったところの一つの能力である、と考えることが、才能教育研究会の私共の考えであります。

生まれて来る子供達は、皆、初めから文化的な存在ではなく、生理的に生まれて来る所の自然児であります。世界中どこで生まれる子供でも、今日生まれて来る子供を、二万年前の人間の生活環境の中で育てるならば、石器時代の人々と少しも違わない人々となりましょう。また、山中へ移して、猿と共に生活せしめるならば、野生の人間として能力を示して生きてゆくであります。また、その同じ子供を、最も文化の高い立派な生活態度をもった家庭で育てるならば、その子供は立派な教養を身につけた、文化人となりましょう。そしてもし、無作法な且つ低い文化環境の家庭で育てるならば、やはりそ

のままの能力を示す人となりましょう。環境は、人間の能力を育てる条件を握っている育成者であります。

心の幸福

永い人類の歴史は、常に争いの絶えない地上の絵巻物でありました。人は常に平和と幸福を望みながら、その生活はその逆の道をたどっていることを思わないではいられません。

平和と幸福は、人の心の中にあるものであって、他にこれを探し求めたとて見つかるものではないのです。

感謝の心を育てられた者は、その心分だけ幸福と平和を与えられた者で、不満の心を育てられた者は、その

心分だけ不幸と不和を与えられた者だと思えます。

親が子供を幸福にしてやりたいと思うならば、いろいろな幸福と平和の心の素となるものを育ててやることこそ、よい贈物です。財産や子供のほしいものを与えてやることに比べて、如何に価値あるものを与えることの出来る親であるかを思うのであります。

子供達のいる前で、親達が自分達の不満や他人への誹謗を話すことは、子供達に不満や誹謗を教えることである育成訓練であつて、こんな心を子供の中に育てることは、如何に子供達を不幸な人間に育てつつあるかを、思わねばならぬと思えます。

人々はいろいろな心を、それぞれの育て方によつて作っておきながら、育てられた子供のその心は生まれつきの心だと考えています。環境が育てたものだ。しかもその中で一番強力な原因は親自身であるという反省を持つ人々は、実に少ないように思われます。

素晴らしい勢いで育つてゆく乳幼児時代の取り扱い方一つで、本能的な力強い心を育ててゆくことの恐ろしさを私共は知らねばならぬ筈であります。

理屈がわかる年ごろには、もうすでに人の心の根底となるべきものが育てあげられているわけであります。この時代までの取り扱い、才能としての心の育て方が如何に重要であるかを思うにつけ、その道、その方法の細かい研究こそ、私共のほしい所のものであります。

（後略）

